
n i g h t & d a y

とわゆらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

n i g h t & d a y

【Nコード】

N 4 5 3 8 Q

【作者名】

とわゆらら

【あらすじ】

モノトーンに彩られた古い街並みの一画に住む、コスチューム・ジュエリーの職人アメリ。注文があれば、専門外のアクセサリーから生活雑貨まで、なんでもこなす。そんな彼女の日常と仕事と恋の話。

1、久しぶりの休日

薬缶の注ぎ口から、しゅんしゅんと音を上げて、深いミストが広がっている。

慌てて台所へと駆けつけ、すぐさま火を止めた。

そろそろ笛つきのものに変えるべきかなと、一瞬考えてはみるものの、まだまだ使えるし、壊れてどうしようもなくなってから、また考え直せばいいやと、結構いい加減な結論に達してしまう。

ふと、そうしてこのまま、あと何年使うことになるのか考えをめぐらせてみるが、やっぱりまったく見当もつかない。

部屋を見渡せば、この家には古いものに新しいもの、それからわずかなガラクタと宝物を端っこに、ありとあらゆるものが、あちらこちらに点在している。

大抵の家具は、蚤の市で購入した誰かの不用な代物だったし、一方で、お気に入りのクリスタル製のドアの取っ手や普段使いのナプキンリング数点は、職場の友人から最近もらい受けた愛すべき新人くんだった。

カフェイン恋しさに、早朝、眠気まなこをゴシゴシとこすって、あらかじめセットしておいたコーヒー・フィルターに、さっそく熱湯を注ぐ。

立ちのぼる芳香に、思わず幸せのひと息をついて、にんまりとした。

今日は久しぶりの休暇で五連休の初日。しかも平日（最高！）。うきうきとした気分のまま、正面の大きな出窓を見やれば、レース越しから晴れやかな朝の街の風景が見渡せた。

今日は何をしよう。

頭の中で、いろいろな希望を打ち出してはみるものの、なかなか決まらない。

美術館めぐりもいいし、野菜市や古本市、ちょっと奮発してバレ

エやオペラを見に行くのもいいかもしれない。

安月給のこの身の上では、せいぜい末席が良いところだが、最高の舞台と極上の音楽をこの身体で感じ、夢のようなひとときを過ごせるのならば、それもある意味、自分への教養投資といって過言ではないだろう。

大人になって本当に良かったと思える瞬間は、もしかしたら、こうしたささやかな贅沢を知ることにあるのではないか——なんて柄にもなく格好つけて、すっかりその気になっていたら、突然、リビングから携帯の呼び鈴のすさまじい音が鳴り響き、思わず、肩がびくっと震えた。

出たら最後、これで今日一日のすべてが終わってしまうような、そんな嫌な予感がする。

執念深いにはかならず、十五回目のベルで、もうこれ以上、避けることもできず、とうとう部屋を移動し、椅子の柄にかけたままの肩かけポシェットから携帯を取り出し、この手に取った。

「……はい」

「良かった。つながった」

吐息混じりの嬉しそうな声に、思わずはっとした。

携帯の液晶画面を見ると、『注意！ ミスター・パーフェクト』とある。

これは職場の女性陣から直々に預かった通称だ。

改めて見ると、すごい名前だ。

「工房が臨時休業とのことで、直接お電話しています。お休み中のところ申し訳ありません」

まず、このちよっぴりシャイで、はにかむような、素直な話し方がいけない。

計算もなくして、こんな声が出せるなんて反則だ。

「アメリカ・バルドーさんでいらっしゃいますか」

そしてさらに、このビロードのように滑らかでゆったりとした魅力的な低音は、もっといけない。

——まずいな。

外交面は、ビジネス上の電話応対程度で、彼とは、さして親しい間柄ではない。

その上、彼がどんなに素晴らしい姿かたちであるかは知っていても、その情報元は、いまだに雑誌かテレビの報道の中だけで、直接会って話したこともない。

つまりわたしは、生身の彼をほとんど知らないのだった。

それなのに、今、彼のこの素敵な声で、何かお願いごとをされてしまったら、絶対に引き受けてしまいそうで、自分で自分が情けない。

彼には、無意識下で女を従わせてしまうような、何か特別な力を持っているように思えてならない。

その家柄は古く、二世紀近くも前から、経済界、社交界に君臨し続ける財閥コプリ家に名を連ね、現ベルナール・ド・コプリ男爵の三男坊にして、若くしてコスチューム・ジュエリー業界の実業家としても成功している時代の寵児。彼の名前は——。

「ポワレ美術館のルイ・コプリです。実は、ビジュ・ファンテジの修繕を数点お願いしたいんです。お引き受けいただけないでしょうか」

2、決心

携帯を切って、重いため息をひとつつく。

「引き受けちゃったよ……」

右掌にある小型の文明の利器を恨めしく睨みつけたのち、わたしはそれを、近場のソファ―に思いっきり投げつけた。

間違いなく、八つ当たり行為だった。

――「他に誰も都合がつかなくて。あなた以外、頼る方がいなくて」

そんな風にいわれてしまったら、相手が彼でなくても、どう頑張ったって、むげに断るのは忍びない。

締め切りは来週の木曜日の正午で、今日を入れても、あと五日しかない。

おおよその依頼内容からいって、今から取り組まなければ絶対に間に合わないような仕事である。

つまりそれは、わたしの休暇をすべて、臨時の仕事で跡形もなくつぶしてしまうことを意味する。

しかもその間、工房は閉まっているため、修繕作業の全行程は、自宅のアトリエという名の狭くて埃っぽい納戸で行うことになる。

知らず、わたしは涙目になった。

くらくらする頭を抱えながら、先ほどのやりとりを思い出す。

――「ご迷惑でなければ、ご自宅まで依頼品をお届けに上がってもよろしいでしょうか」

事実、ここからポワレまでは少し遠く、目的地まで、電車やバスの乗り換えを複雑に入り組まなければならぬので、根っからの方

向音痴のわたしにとって、それは大変ありがたい申し出であった。しかしながら、一職人風情のわたしに、それはあまりにも畏れ多いことであり、現実的に、辞退申し上げるべきことでもあった。どうかお気遣いなくと、すぐさま丁重にお断りしたが、どうしてもそうさせて欲しいと、相手もなかなか譲らない。これ以上、長引かせることもできず、ついにわたしは、よろしく願いますと頭を下げるかたちとなった。



差し迫った問題は部屋だった。

いざぼんやりと周りを見渡せば、今朝は見えていなかったものが、徐々にはつきりと、その全貌をあらわにした。

出しっぱなしの総菜パックは、中身は空っぽなのに、テーブルの上に置いたままだった。

台所はコーヒーのほろ苦い名香で満たされていたが、洗い場には未洗淨の食器が、そこかしこいっぱいに積み上げられており、わたしの家事嫌いな性格を如実に物語っている。

脱ぎっぱなしのヨレヨレのブラック・ジーンズと白いティーシャツは、見るも無惨な有り様で床に広がっており、くず入れ代わりの籐の籠からは、昨夜電線して、即お払い箱行きとなってしまうたストッキングの亡骸が、追い討ちをかけるように、ひよっこりと顔を覗かせていた。

我ながら、がっかりである。

女性として、一社会人として、これは、どう考えても極めて深刻な状況に違いない。

来客をもてなす上で、その会場は、どの程度のご愛嬌まで許されるのだろうか。

先方いわく、今から西駅発の地下鉄に乗って、こちらに向かうとのことだから、どんなに多く見積もっても、あと一時間弱といった

ところか。

ルイ・コプリが来る――。

仕方がない。

全身に広がる鈍痛と、しばしば罹患する難病――『掃除やりたくない病』を極力無視して、わたしは心を決めた。

3、神さまに愛された人

郊外カリオオの森の中にあるコスチューム・ジュエリー専門の小さな美術館ポワレは、すべての女性を魅了してやまない特別な存在である。

コスチューム・ジュエリーとは、その名の通り、気軽に装いを楽しむことが目的とされ、本物の宝石は使われない。

ビーズやラインストーン、バロック真珠などにはじまるイミテーションを用いて、すべての工程が複雑な手作業でなされる独特のビジュウである。

オープンして、わずか三年。

今や、国内のみならず、外国からの客人、リピーターも後を絶たない。

そこでは、歴史的価値のある貴重なアンティークものから最先端のモードまで、ありとあらゆる見事な宝飾芸術を楽しむことができる。

職場の仲間の多くは、ポワレで丸一日過ごせるのならば、三食抜いたって構わないと豪語する。

そして今――。

わたしの狭く埃っぽいアトリエで、おおよそこの場に似つかわしくない見目麗しい男性が、わたしの目の前に立っていた。

「これは一体どういう作りですか。留め具も有機溶剤の跡も見当たらないけど」

「あ、ああ。それはですね、実は――」

彼は、瞳をきらきらと輝かせながら、わたしの試作品を手に取り、思ったことや疑問点を次々に質問する。

「なるほどね。すごいな。僕にはとても考えがつかない」

そういつて、わたしを見て、少年のように無邪気に微笑むこの男。その惜しみのない素晴らしい笑顔に、一瞬、彼が誰なのかわから

なくなってしまうが、驚くべきことに、彼こそが、ポワレ美術館の最高経営責任者——ルイ・コプリ、その人であった。



なんとか客間として機能できる程度に片付いたりビングにて、ポワレ美術館からの詳細な依頼内容、契約の確認、修繕品の受け取りが終わった。

その間、わたしも彼も、始終ビジネスモードで、双方、仕事の枠組みから外れることは一切なかった。

握手を交わし、いよいよお別れというときになって、思いがけず、彼の方から、許しがあれば作業場を見学したいとの申し出があり、びっくりした。

純粹に、彼のような人がなぜ？ という気持ちだった。

ここには完成品は一つとして残されていないし、あるのは失敗作か作業途中の駄作じみたものだけだった。それでも彼は構わないという。

「塗装材や金属の独特な匂いもありますけど、それでもいいですか」
しつこいようだが、もう一度わたしは確認した。
結構ですと、彼は品良く微笑んだ。



アトリエ（またの名を納戸）に案内してすぐ、鋼鉄なビジネスマンの仮面はいずこへ、彼から、喜びを隠しきれない、楽しそうな歓声が上がった。

「おとぎ話の世界みたいだ」

彼はまるで、価値ある宝物に触れるような美しい手つきで、未完成品、試作品を問わず、ひとつひとつを大切に扱って見てくれた。

「仕事柄、作品を鑑賞することはあっても、創作段階のものを見る

機会はあまりなかったんです。職人の方を前に、勉強不足で、お恥ずかしい限りですが」

そういつて、少し照れながらも友人のように気さくに話をしてくれる彼という人が、あまりにも得がたくて、現実とも思われず、信じがたい。

わたしからして、天にも近い特権階級の人間が、どうしてこんなボロ家の安アパートで、名もない職人の話に耳を傾け、その職人が作った未熟な作品を、こうして真剣に鑑賞してくれるのだろうか。

わたしはそつと彼を見た。

彼は、その存在自体が近寄りがたくて神々しいほどなのに、笑うと右の頬だけにえくぼが浮かんで、とても愛らしかった。

顎のラインまでゆったりとカールされた髪は黒くつややかで、おざなりシニョンの赤毛で乾燥気味なわたしの髪とは大きな違いである。

背は、平均身長よりやや低めのわたしから見上げて、視線が彼の肩のラインにぶつかるような感じだから、やっぱり高い。

低賃賃の我が家ながら、わたしにとって十二分に余裕のある高さの天井が、彼の存在ひとつで、まったく違う印象になってしまう。

鼻梁は高く通っていて、唇は薄く、口角は微笑みのためにあるかのように、上向きに優しくカーブしている。

青色とも緑色とも違う、ちょうど往年の大女優リズ・テラーを思わせる彼の瞳は見事なすみれ色で、それこそ彼自身が、生ける寶石のようだった。

——神さまに愛された人。

ふと、頭の中に、そんな言葉が浮かんだ。



それからほどなくして、また別件の仕事があるとのことで、わたしは彼を玄関先まで見送ることになった。

「今日は本当にありがとう。急な依頼を引き受けてくれたばかりか、大切な仕事場まで」

帰り際、彼はふんわりと頬を紅潮させて、恥ずかしそうに微笑んだ。

「でも、長居してごめんなさい。つい夢中になってしまっ

「いいえ、とんでもない」

わたしは首を振った。そして最後に思いきって、彼の両手をしっかりと取った。

彼は少し驚いたように目を見張っていたけれど、わたしは構わずに続けた。

どうしても彼に、感謝の気持ちを伝えなかった。

「まだ未完成の、あんなできそこないの試作を、ルイさんのように美しい所作で見てくださる方はいません。すごく嬉しかったです。」

わたしの方こそ、本当に本当にありがとうございました」

彼はしばらくきよんとしたままわたしを見つめていたが、最後には、優しく顔をほころばせて、丁寧に暇を告げた。



扉を閉めて、緊張から開放へ、ゆっくりと息を吐く。

つい先ほどまで、自分の休息を優先するあまり、この仕事を引き受けたことを後悔していたくせに、今やわたしはすっかり夢見心地だった。

玄関の扉を背に寄りかかって、瞳を閉じて、誰にするでもなく、にっこりと微笑む。

若くして、あれほどすべてを掌中にした、一見クールで優秀なビジネススマンが、実際に会ってみると、意外にもすごくキュートで、親しみやすくて、とても魅力的だった。

それでも、この仕事が終われば、もう直接会うことも叶わない、
彼が、そういう類の特別な人間であることに変わりはない。

「さて、やるとしますか」

わたしは鼻歌を歌いながら、ウキウキと仕事場に向かった。

仕事前は、失敗をしないように、怪我をしないようにと、自分にある種のプレッシャーをかけてしまうことが常だったが、今日はそんなこともなく、比較的、楽な気持ちで作業に入った。

4、招かれざる客人

「アメリ、ごめん。しばらく泊めて」

扉を開けると、そこには、身ひとつ、中型のキャリーバックひとつ、困ったように眉根を寄せた、かわいいかわい男子が立っていた。

ふわふわの金髪の巻き毛に、憂いを帯びた深い青色の大きな瞳がとても印象的である。

「やだ」

反射的にドアノブを引っ張り、今の光景は見なかったことにしよう、目の前の人間を閉め出そうとしたが、逆に相手にすごい勢いでドアの側面をつかまれ、阻まれ、結果、わたしは泣く泣く、この少年を家に招き入れることになった。



ポワレ美術館の仕事は、初日から大変だった。

依頼された八点の内の六点は、一つの作品につき細工が複雑で、修復に難しい技術を要する箇所がいくつもあった。

特に、古いバロック真珠の三連パールのネックレスは、所々、光沢膜が剥げていたり、酸化の傷みが激しく、いくつかの珠に小さな穴の跡が見受けられたりして、完成まで、かなりの時間と労力を費やした。

専門書を何冊も開き、材質や修復方法を細かく確認し、寝る間も惜しんで作業を続けた。

締め切り日が明日に迫った本日夕刻間際になって、ようやく依頼品全品の修復とクリーニングが完了した。

途中、なかなか思うようにいかず、何度も泣きそうになったし、長時間に渡り何日も同じ姿勢のまま仕事をしていたので、肩も腰も

痛くて、目もしばしばとして、全身が激しく疲れを訴えていた。

でも、仕事が終わった今、もうそんなことはどうでも良かった。

わたしはしばらく、言い知れぬ達成感と、仕事からの大きな開放感に、ゆったりまったりと浸っていた。

景気付けに祝い酒を一杯煽ろうと、そう思った矢先の招かれざる客人だった。

わたしは今、とっても気分を害している。

「飲んだら帰ってよ」

「冷たい奴。来たばかりなのに」

グラスにキンキンに冷えたペリエを注いで渡すと、図々しくも、ライムも入れてと注文するこの生意気な少年は、フィン・スピアーズという。

年は十八。工房で一番の若手で、見た目、ハチミツのようなかわい子ちゃんである。

「ごちそうになって何いってんの。いいからそのまま飲め」

フィンは、三年前、海の向こう遠く、小さな島国から単身でやってきた。

専門は、コスチューム・ジュエリーの他に、レース、刺繍、ガラス細工の四部門で、業界でも珍しい多部門の若きプロフェッショナルとして、大変期待されている。

不真面目な外見の割に、仕事は大真面目で完成度も高く、意外にも先輩を立てる謙虚な一面もあったりして、そのギャップが受け、職場では男女共に人気が高い。

今春は、国の職人が死ぬまでには獲得したいという超難関、最優秀職人の称号―『エナ』の、五次ある内の第三次試験まで史上最年少で残った。

結果は第四次試験で不合格となったが、このままいけば、近い将来、称号獲得も夢ではないといわれている。

一見ひよろりと痩せ型で、まだまだあどけないフィンは、自慢のかわいい弟として連れて歩くにはいいけれど、恋人にはまだまだ物

足りない、そんな感じのキレイな男の子だった。

「女の家から出てきたんだ」

そして悲しいことに、異性の影が切れない、残念な男の子でもあった。

フィンに出会くと、大抵の女性、それも仕事のできる自立したキヤリアウーマンの鏡のような人が、彼への恋情に囚われて最後、その世界から抜け出せなくなってしまいうらしい。

中毒にも似て、フィンから離れられなくなり、その関係者のほとんどが壮絶な修羅場を迎えたというのだから恐ろしい。

まさに魔性の少年である。

かつてフィンは、二人兄妹の末っ子のわたしにとって、かわいい弟のような存在だったし、年は五つ離れているが、いい友だちで、職人として尊敬もしていた。

職場で彼の私生活が話題になっても、最初はただの噂話にすぎないと思っていた。

だが、今から一年前、ただの一度だけ、発狂状態でフィンの名前を叫んで暴れる女性が職場に現れて、彼の噂が真実に近いことを知った。

セキュリティーを呼び、なんとか事なきを得たが、後日、フィンは、工房長、他先輩方をはじめとする人々に、かなりきつく叱責と注意を受けたと記憶している。

——私生活の臭いもの黒いものは職場に持ち込んではならない——。

あれからフィンも成長して、少しは落ち着いたのかなと思っていたけれど、やっぱり、また女なのか。

「このままいくと、なんだかエスカレートして、大変なことになりそうだったから、とにかく謝って、跪いて、許してもらって別れた」
聞けば、まずはじめに浮気を疑われ、刃物片手に脅され、そんな

狂気のさなか、結婚を迫られたらしい。

「俺まだ十八だよ。さすがにないよ」

最後は彼女の方も泣きながらフィンに謝罪をし、まさに惨憺たる有り様だったとか。

とりあえず、恋人関係には一応の終焉を迎えたようだった。

あまりのディープな内容に、わたしは声も出なかった。

「あと、これ見て」

指し示されたところに意識を向けると、左耳近く後方の大部分の髪が、そのこの辺りだけ、無残にも短く散切りになっていた。

「ひどいだろう？」

「うん……」

知らず眉間に皺が寄った。

この一年、フィンだけはヤバイと、気持ち距離を置いていたわたしだったが、身から出た錆とはいえ、少し彼が気の毒になった。

自然とフィンに手が伸びて、気づいたら彼の頭を撫でていた――が、いくら経たない内に、不意にその手を取られ、わたしは彼の胸の中に閉じ込められてしまった。

「ちよつとフィン！」

「頼むよアメリ。ちよつとの間だけ。お願い」

その色っぽいフィンの低音が、直に腰にきたような気がした。

ムカつく。

何も人肌恋しくしていたわけではないのに、フィンめ、年下のくせに生意気な。

「は・な・れ・ろ」

「い・や・だ」

相手の胸を押したり引いたりジタバタしてみたが、フィンの体はびくともしない。

なんだか悔しくなって、わたしの口調を真似てクスクスと笑っているフィンの手の甲をぎゅっとつねった。

その手は何気なくわたしの腰に回り、不埒な動きをしていたのだ。

フィンは一瞬小さくうめいて、また愛らしい顔で楽しそうに笑った。

「ごめんごめん。調子に乗っちゃった」

アッハッハと明るく笑い飛ばすフィンに脱力する。

助平心全開な折にも、男のさがを隠さず、けれど夏空のように爽やかで不快度ゼロな手腕は、敵ながらアッパレである。

先ほどの行為への非難も、いつの間にかわたしの胸の内から消えている。

諦めの息をついて、再びフィンを見上げた。

「どのくらいここにいたいのか？」

互いの吐息が顔にかかるほど近い先には、思いがけず、フィンの不安げな瞳があった。フィンは遠慮がちに目を伏せ、呟いた。

「半、年……」

何それ。だめ。何いつてるの。

「とんでもない。長すぎる。絶対だめ」

「じゃあ五ヶ月」

「二ヶ月」

「三ヶ月。三ヶ月もだめ？　お願い。生活費はちゃんと払う」

「んー……」

なぜかこれまでになくフィンは必死だった。限りなく透明な瞳が少しだけ潤んでいる。

「食事の支度もするし、掃除もする」

「食事……」

普段、出来合いのものばかりで侘びしい食生活を送っていたわたしにとって、そういった誘惑は大変効果があった。

フィンはしめたとばかりに瞳をキラリと輝かせた。

「野菜をいっぱい使って、デザートも手作りで、アメリカ専用に毎日おいしい料理を作るよ」

人気のオーガニック・レストランの厨房でアルバイトをしているフィンは、多くの人に、その道でもいけたね！　といわれるほど、

とっても料理上手な男だった。

優秀な職人とはいえ、就業三年目のフィンの収入は、まだまだ非常に心許ない。

最初は生活のために始めた副業だったそうだが、要領のいいフィンは、勤めていくらしめない内にめきめきと頭角を現し、今や身分も二つ三つほど昇格し、お店でも、かなり重宝がられていると聞く。さらに彼は、隙間時間を見て、中級料理人の資格まで取ってしまったというのだから、本当に驚きである。

「他に当たるところはないの？」

「ない。友だちでフリーな人、アメリカくらいしか知らない」

がっくりと肩が落ちた。現時点で、わたしは男日照り七ヶ月目だった。

「お願いアメリ。きっと困らせないから」

「うーん……」

事情を聞いたら、ちょっとほっとけないし、かわいいし、いい職人だし、昔いい友だちだったし、年下だし、やっぱりかわいいし、わたし、おいしい食事に飢えてるし。

「わかった」

結局、無念にも短い抵抗に終わった。

かわいい生き物と、己の飽くなき食欲に負けた。

5、オルウェン・フォレスト工房

さっとカーテンを引く音と同時に、眩しい朝の光が差し込んで、わたしはうめき声を上げた。

「起きて、アメリ」

こめかみに羽のような口づけを受けて、ぱっちり目を開ける。

「朝だよ。一緒にご飯食べよう」

白いシャツにスキニージーンズのフィンは、真っ赤な大判のエプロンを身につけて、朝からなんだか最高に決まっていた。

陽に透けて輝く金髪に、笑顔も素敵だ。

「おはようフィン。早いね。あ」

少し開いたままのドアの隙間から、ベーコンやチーズの食欲をかき立てる芳しい香りと、かすかに果物の甘い匂いがする。自然と笑顔になった。

「すぐ準備する。待ってて」



出勤して早々に、わたしは職場の最高責任者である工房長を訪ねた。

「失礼いたします」

「どうぞ」

重要な連絡事項は、あらかじめメールで通してあった。

わたしは彼を前にして、先日、臨時に引き受けた仕事の内容を簡単に報告し、その依頼品と書類のすべてを提出した。

「こちらが今回わたしが担当した仕事の詳細になります。ご確認ください」

ロマンスグレーに渋くてダンディーな工房長——ジャン・コクトーは、職場の花であり、すべての職人が目指すべきところの最高峰

である。

誰もが認めるコスチューム・ジュエリーの匠でありながら、未だにひたむきに仕事と向き合う根っからの職人気質で、時に仕事には厳しく辛辣な一面も見せるが、わたしはこの上司を深く敬愛し尊敬していた。

「依頼はポワレ美術館からですね」

「はい」

基本的にわたしたちの仕事は、対企業に限定した契約の中で行われるため、今回の仕事も、書類上は、わたしの就業地——オルウェン・フォレスト工房が引き受けたということになっている。

元々、この工房は、ポワレ美術館の他に、高級アクセサリーブランドの『シャロット』と、その姉妹ブランドで十代の子をターゲットにした『ミュゼ』の三社と専属契約を結んでいる。

したがって、各社から各職人宛に、直接依頼が寄せられることも少なくない。

当工房の全職人の個人情報、三社それぞれに全面的に引き渡されており、各社員の各々のコンピューターには、データベースとして、各職人の専門分野をはじめ、経歴、住所、連絡先まで、すべてが周到に納められている。

「よろしいでしょう。上に回します」

「ありがとうございます」

修繕された依頼品は、その後、工房内の最高名工と呼ばれる『エナ』の称号を持った職人の監査を受け、検品合格後、専門配達員の手で直接依頼主へと届けられる。

「確かにお預かりしましたよ。休日中にもかかわらず、よく頑張りましたね」

そう笑顔で褒められて、自然と頬に熱が集まった。

工房長の微笑みは、最高に素敵でセクシーである。

超のつく愛妻家で、お孫さんが三人もいる初老の男性に、いたずらな考えは浮かぶまでもないが、やっぱり純粹に憧れてしまう。

彼の奥さまや娘さんがうらやましい。

「それではよろしくお願いいたします」

部屋を出て、人知れず、ガッツポーズを決めた。

今朝は、フィンの絶品のチーズオムレツに手作りの焼き立てのクロワッサン、フルーツがいっぱいに添えられたふわふわのパンナコッタをいただいた。

常日頃から、だめだなあ、いけないなあとは思いつつ、わたしは健康に無頓着なところがあった。

仕事を立て込んで、その他のことが面倒になると、朝食どころか昼食まで簡単に抜いてしまう。

だが、そんな日々とも今日からしばらくお別れである。

向こう三ヶ月の期間限定で、他力本願はなはだしいということなかれ、わたしには、フィンという頼もしい同居人兼料理人が付いている。

いよいよわたしも、飢えと不健康に惑わされない素敵な大人の仲間入りである。

もしかしたら、あの日あのと引き受けたこと、努力したことが、休み明けの幸先につながっているのかもしれない。

今朝は今までになく体に力がみなぎって、出勤時には、なぜか見慣れた街の風景が、普段よりも鮮やかに美しく見えた（そしてフィンには鼻で笑われた）。

考えの足りない楽天家だといわれればそれまでだが、とにかく、今朝のわたしは神がかって絶好調だった。

いつもの職場でのわたしが、どんなにミスが多くて怪我が多くて上司に叱られる職人であるかの説明は、せっかくだから割愛する。



午後二時すぎ。軽い昼食として、ドーナツとカプチーノ・ソージャを簡単に済ませ、わたしは職場のスタツフボードで午後の仕事

の内容を確認していた。

不意に、後ろから肩をポンと叩かれ、振り返って、微妙な気持ちになった。

「仲良くフィンと恋人出社だって？ 何があったの。白状しちゃうなさい」

同僚のミーシャ・トトゥである。

専門はガラス細工と彫刻で、年は二十八。

亜麻色の長い髪を、いつもきれいにアップでまとめているあでやかな美女だ。

最近、初等教育機関の職業科で教壇に立つこともあり、多分野での活躍も目覚ましい。

「そんなじゃないから。その、ちょっとした事情があるの。長くなるから、今は話せないけど」

美人なのに、気持ち男前で飾らない彼女を、わたしは友人として愛していた。

だが、この手の話は、わたしの過去の経験上、彼女を相手に打ち明けたいとは思わなかった。

必ず面倒なことになる。

わたしは急いでいるからと、すぐさま作業場へときびすを返したが、そうはさせるかと、彼女の長い足が行く手を阻み、ボルドーの爪先も美しい細く長い指にがちりと肩を掴まれ、にわかに痛みを覚えた。

彼女は、やや嗜虐趣味の傾向があった。

「ミーシャ、あのね」

「ア・メ・リ」

ホラー映画の悪役のように口角をニヤリと上げて、ミーシャは小鳥のように優しくささやいた。

「何を急ぐことがあるの。さあお姉さんに話しなさい。そのちょっとした事情、ゼーんぶ残さず聞きたいわ。いいでしょう」



「何それ！　すっごくうらやましい！」

いつまでもくすくすと楽しそうに肩を震わせる彼女を前に、わたしは天を仰いだ。だから嫌だったのだ。

「そんなこと、ぜんぜん思っただけに」

「まあね」

恨めしく彼女を睨んでみれば、まあまあと、適当にいなされる。

「それにしても、食べ物に釣られて男を家に上げるだなんて、アメリカ、相当ずれてるわよ。ここは普通、フィンの体を狙う！　犯す！　が正解でしょ。あれだけ絵に描いたような美少年なんだから」
繊細で美しい顔をしているくせに、ミーシャは過激で肉食系だった。

うんざりして頭を振った。

「やめて」

「やめない」

にーっと歯を見せて笑うミーシャに、とうとう脱力する。

「まあ、その気がないなら用心することよ。でなきゃ――」

ミーシャは身を乗り出して、突然、怖い顔をした。

――何日もしない内に、アメリカ、ぱっくり食べられちゃうんだからね！

「わかってる。気は抜かない」

「そうよ。そうしなさい」

なぜかミーシャの射抜くような視線に居心地が悪くなって、何気なく辺りを見回せば、間休みに入ったのか、自販機前で、他の職人と談笑中のフィンと目が合った。

フィンは一瞬、瞳をまばたかせると、にっこりと微笑んで、わたしにウィンクした。

「あらまあ。おかわいらしいこと」

ミーシャはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた。

「きつとこれから面白いことになるわ。楽しみね。すごーく」

フィンに対して堂々と好戦的に微笑む、このよくわからない女神さまを尻目に、わたしは口元が引きつるのを感じた。

6、カサノバでジゴロ

終業間際になって、ボトムスの右ポケットから携帯の振動が伝わった。取り出してみると、差出人はフィンだった。

——「ごめん。急なんだけど、今日は夕食作れません。帰りはかなり遅くなると思うので、どうか先に寝ていてください。アメリ、本当にごめん。今日だけ許して」

「ふーん」

内心、かなりブーイングものだった。

でも、仕方がない。

わたしは速攻で返信した。

——「楽しんで」

携帯をしまつて、背もたれに体を預け、ハアと息を吐く。

たぶんそのころには、わたしは見るからにがっかりした顔をしていたと思う。

「今夜のごはんはなしか……」

食い意地が張っているといわれても構わない。

でも、それにしてもである。

「フィン、もう相手がいるんだ」

ヘナヘナと体の力が抜けて、机にうつ伏せになる。

かなり遅くなる、先に寝ているということは、彼の長い夜に付き合うべき女性の影を思わせる。

つい昨日恋人と別れたばかりなのに、もう今夜からそんな相手がいるのかと思うと、なんだかいたたまれないというよりは、むしろ、とっても——。

「うらやましい……」

そう呟いて、なんだか妙に寂しくなってしまった。

生活面には安全でつまらないわたしのような女があつて、欲望を満たすべきところには然るべき他の女があつて。

——「あのアメリカって女、本当に便利だぜ。浮気はし放題だし、騙されてくれるは金払いはいいわ——」

どうしてか、昔、偶然盗み聞いてしまった恋人の言葉を思い出した。

この件に関しては、古傷というにはまだまだ時間も浅く、時々血が滲む。

「帰ろ」

そう。まずは帰るのだ。

すでに色々やってしまった感はあるし、やらなければならないこと、考えなければならぬことは山積みだったが、まあそれはそれ。これはこれ。なんとかなるだろう。確信はないが——わたしはそう小さくひとりごちて、急いで帰り支度を済ませ、逃げるように工房を後にした。



古いアパートマン前。

街の灯が歩道にかかって、長い影が伸びる中。

思いがけず、見覚えのある人を見つけ、わたしは立ち止まった。

その人は優雅に壁に背もたれて、その肩には大きな花束が乗せられており、その端の持ち手の方が右手で軽く押さえつけられている。長身にトレンチコートが映えて、まるで絵画から抜け出てきたようだ。

こんな浮浪者はいないし、ましてや最近街で多発の車泥棒である

はずもない。

「アメリカさん？」

その極上の深い声色に、この身が溶けてしまいそうだった。

「ルイさん」

柄にもなく照れてしまって、応える声は小さくなった。

ルイはくすりと笑って、わたしの方まで歩を進め、わたしを間近に見とめると、花が開いたように、にっこりと微笑んだ。

「良かった。ずっとお会いしたくて」

そういつてすぐに「はい」と差し出されたそれは、品の良い芳香も素晴らしい豪勢な花束で、その花の種類や色に思いあたるところがあつて、胸がじんわりとあたたかくなった。

それは、カーラを主軸に深い緑色を基調としており、彼がわたしの瞳の色に合わせて選んでくれただろうことが窺えた。

昔からの慣習で、花を選ぶときは相手の目の色に合わせるものだ。紫の瞳にはすみれの花を。青の瞳には淡いリラの花を。

「先日のお礼です。本当に素晴らしい出来でした」

自然と頬も熱くなった。

最近、花なんてずっともらっていなかった。

素直に嬉しい。

喜びのままに、くしゃくしゃの顔でお礼をいった。

思いがけない手放しの謝意に、作り手として目頭も熱くなる。

「こんな素敵なお花、今までいただいたことがないです。ありがとうございます。本当にありがとうございます」

自分の意志とは関係なく、最後の方で、ちょっと声が裏返ったような気がした。

勘違いだと思いたかったが、長い指先を口元にあてて目を細めるルイに、そうかやっぱりと、顔が赤らむのを覚えた。

「すみません。わたし、緊張がすぎると、時々言葉を囁んだり、声が裏返ったり」

「いいんですよ。どうか気にしないで」

先ほどの楽しそうな微笑みをたたえた顔はそのままに、ルイは少し恥ずかしそうに眉根を寄せて、わたしを見つめた。

胸がきゅんきゅんする。

「あのねアメリカさん、またすごく唐突なんですけど」

彼の瞳の色が濃くなり、その様があんまり美しくて、わたしは彼から目が放せなくなった。

「夕食をご一緒にいかがですか。ここから少し行っただころに、うまい店を一件知っているんです。ぜひご紹介したくて」

7、おいしい時間

案内された店を前に、わたしは思わずにっこりと微笑んでしまった。

ルイは片眉を上げて、なんだか不思議そうな顔をしている。

「ご存知でした？」

「ええ」

久しぶりにここにやってきた。

わたしはすっかり嬉しくなっていた。

あたたかい色合いのレンガ造りに、お店の歴史と共にいい具合にくすんできた橙色の瓦屋根。石畳の階段をのぼれば、重厚な緑色のドアの楕円型の小窓には、金色の文字で『キキ ― おいしい時間を提供いたします』とある。この文句は、家族みんなで考えたものだ。

このこじんまりとして、雰囲気のあるカジュアルなレストラン『キキ』は、わたしの実兄――シャルルの店だった。



「そうか。もしかしてあなたが……」

「アメリカ！」

突然、勢い良く扉が開き、目の前に現れた人にぎょつとした。

――シャルル？

「ちょ、ま」

きちんと向き合って言葉を交わす前に、わたしは兄に固く抱き締められていた。

「なんで会いにこないアメリカ。もう何ヶ月も顔を見ていない」

「ご、ごめん……」

兄とは歳が五つ離れており、両親が共稼ぎで、小さい頃から鍵っ子だったわたしにとって、彼は心配性な父親であり、過保護な母親だった。

時々こうしてすごく暑苦しいけれど、なんだかんだいって面倒見はいいし、情は深いし、妹からして、兄貴ってやっぱりいいものだよねと思わせるものがシャルルにはある。

この兄を拒否するという選択肢は、昔からわたしにはない。

だが、それも束の間、困ったなあと思っている内に、兄からガバツと引き剥がされた。

「おいルイ！」

「残念だなシャルル。今夜はいつも通りにはいかない。パートナーは僕だ」

なぜか穏やかではない空気の中で、どうやらルイと兄が旧知の仲であることを知った。

兄はさらに抗議の声を上げたが、ルイは無言をいわさず、守るようにわたしの肩を抱き、余裕の表情で告げた。

「まずは中に入ろう。話はそれからだ」



兄とルイは、大学校時代からの悪友とのことだった。

「それにしても、アメリカさんがシャルルの妹さんだったなんてね」
友だちの妹さんなら、もう少しだけ感じて話してもいいのかなど、小首を傾げるルイにポツとのぼせ上がって、わたしは力強くうなづいた。

「ぜひ！」

「ただしお得意の色仕掛けはなしだ馬鹿野郎」

すっかり言葉が重なってしまった隣の席の不貞腐れ者をキッと睨む。

シャルルったら、ちゃっかりルイとわたしの間に入って、ちょうど真上から見ると、三角形を成して着席しているのだ。

それに先ほどから、アメリカはこれが好きだったろ？　これは苦手だったよなと、ウェイターやウェイトレス、果ては自分の友人であるはずのルイの存在まで押し退けて、勝手に注文したりなんかしている。

まったくやりたい放題である。

わたしは兄の服の裾を引っ張り、口を尖らせた。

「ちよつとシャルル、今の――」

「なんだよ、いいだろ？　兄として当然の牽制だ」

むしろ感謝して欲しいくらいだねと、兄は譲らない。

いい加減にして欲しい。

決して卑下しているわけではないが、ルイのような、いかにも典型的ないい男を相手につまらない牽制とか、かえってわたしが惨めである。

ルイはしばらくわたしたち兄妹のトンチンカンなやり取りを楽しそうに見ていたが、不意に思いついたように声を上げた。

「そういえばシャルル、どうして僕たちが外にいてわかったんだ？」

「あ、あ？」

兄は一瞬、品のない声を出して、店内の紳士淑女の皆さまの顰蹙を買った。

すかさずテーブルセンターの下で、兄の足元を思いっきり踏んづけてやると、兄は一瞬怖い顔でわたしを睨みつけ、わたしの耳元に唇を寄せて「あとで覚えてろよ」とドスの効いた声で子どもっぽい威しをかけた。

負けずにわたしも兄を鋭く睨みつけたのだが、まったくなんの効果もないようで、兄にはふっと鼻で笑われた。

いくつになってもこの男には敵わないような気がする。

面倒くさいのか、兄はのらりくらりと語り出した。

「ルイが女連れてうちにくるっていうから――」

簡潔にはこうだ。

一体どんな女であろうかと興味をそそられ、そろそろ時間かなと、常には珍しく窓の外をちらりと見やれば、そこにはよく見知ったチビな赤毛の女が立っているではないか。

慌てて店を飛び出し、柄にもなくついつい――とまあ、こういうことらしい。

他にもごちゃごちゃと何かいていたが、さほど重要とも思われず、わたしは大方を聞き流した。

「柄にもなくついついって、シャルル、お前さ」

「黙れルイ。それ以上何かいったら殺す」

なんとも物騒な会話である。

けれど、どことなく楽しそうな雰囲気なのだから、男って妙だ。

会話に入るタイミングが掴めず、もじもじと居心地の悪さを覚えていると、思いがけず、ルイとの視線がかち合い、彼のすみれ色の瞳に、からかうような陽気な光を見た。

「ねえアメリカさん、愛が重いでしょう」

こんな風にその日の夕食は、兄とルイの軽妙な会話に終始した。慣れてみると、男同士の軽口の叩き合いは、見ているだけで楽しかった。

今の兄はちょっとアレなのだが、本来はご近所でも評判の好青年だったわけで、学生時代、パーティーの際にダンスの相手のいないわたしにとって、兄は最後の砦であった。

兄を隣に立たせれば、女子としてのプライドは保たれたし、リードも巧みな兄の傍は精神的に楽だった。

悲しいことに、これまで、いついかなるときも、わたしの公のパートナーは常に兄だったわけで、最初にあったルイの文句は、わたしを兄の妹と知った上での、ある種の稚気ある言葉だったのかもしれない。

時折本当にわたしの兄なのだろうかとはんやり疑ってしまうほど、

何事にも秀でて卒のない兄のシャルルだが、今夜のように友だちとやり合う姿は、なんだかチャラチャラのやんちゃな学生みたいで、普段よりもずっと若くて親しみやすいように思える。

そんな兄の様子が妹として、なぜだかちょっぴりおかしい。

わたしはしばらく兄とルイのやり取りを、静かにニコニコと眺めていた。

そういえば、まだ兄は二十八だ。老成するには早すぎる。となると、ルイはいくつだろう。実は兄よりもやや若く見えるのだが、二人は至極対等な関係にあるようだし、やっぱり同じくらいなのだろうか。

そんなことをあれこれと考えている内に、またルイと視線が合った。

もうこれは反射的なものだ。

再び頬に急激に熱が上がる。

「いっ！ ちょっとシャルル！」

けれど今度は片頬を兄に意地悪く掴まれ引っ張られ、最後には痛い意味で自分の頬を赤くすることとなった。

兄いわく、ブス顔でヘラヘラするなどのことだった。

7、おいしい時間（後書き）

【あとがき】

アメリカの兄のシャルルの店――『キキ』は、大好きな書き手さんのお一人であるk i k iさんのお名前にちなんで名づけました。
この場をお借りして、お名前を拝借することを快く了承してください。
ったk i k iさんにお礼申し上げます。
本当にありがとうございました。

とわゆらら

8、まどろみの夜

今日も今日とて眠い。

あくびをかみ殺しながら、家の中で一番居心地のよいソファアに座り、新聞を手取る。

「アーメリ！ 何してんの？」

一面を開いてすぐ、同居人のフィンが、弾むように隣に腰掛け、人差し指でわたしの左頬をぷによつと押した。

「なんか腫れてる」

そちらに顔を向けることもなく、わたしはすまし顔でいった。

「気にしないで。大したことないから」

「気になるし」

おそらくフィンは、今、口をツンと尖らせるか、眉根を寄せるかして、掛け値なしにかわいい表情をしているに違いない。

でも、それって、今にも眠たいわたしには、ちよつとうつとおしい。

同居二日目の夜にして、家主のわたしが、なぜか居候に遠慮をする立場になり（相手からじゃんけんを提案され、勝負に負けた）、今夜のバスルームの優先権を、彼に譲ることになった。

こんなところで油を売っていないで、早くその花盛りの頭に冷水でも浴びせてシャキツとしろ！ といいたところだ。

角が立ちそうなので、小心者のわたしは、もちろん、そんなセリフを口にする勇氣はないのだが――。

わたしは片手でしっしと彼を払いのけるような仕草をした。

「えーっと、なになに」

すねる彼に構わず、氣を取り直して目をすがめ、ある記事を真剣に読みこむ。

そこには、つい先ほどまで一緒だったミスター・パーフェクトのモノクロの写真と、次代のコスチューム・ジュエリーに関する熱の

入った文章があった。

思わずため息である。

メジャーな新聞で特集が組まれるほど、ルイ・コプリという人物は、やっぱりすごい人なのだった。

それにしても、フィンの顔が、やけに近くに感じるのは気のせいだろうか。いや――。

「近い、フィン」

わたしは片手で彼を押し退けた。



今に始まったことではないが、今夜の兄は、非常に無遠慮だった。色白で皮の薄い、ともすると、不健康に見られがちなわたしの皮膚は、人にちよっとつねられるだけで、すぐに真っ赤に腫れてしまう。

わかっていくくせにそんなことをするのだから、シャルルって時たまに本当にムカつく奴なのだ。

今夜は一体どういうつもりだったのだろう。

オレサマな兄貴の思うことはよくわからない。

先ほど兄の車で恩着せがましく自宅前まで送り届けられ、夕食代も、兄が勝手にルイとわたしの二人分を精算した。

つまり、今夜の夕飯代がタダになったということである。

毎日つましい生活を送り続けるわたしだけに、それは小躍りしたいほど喜ばしいことだった。

一方で、育ちもよく、模範的な優等生ホストであるルイは、なかなか素直に首肯するわけにはいかないらしかった。

無論、彼から微笑みが絶やされることは決してなかったが、その後は、自分こそがご馳走するはずだったのにと、しぶとく兄に食らいついていた。

しかし、テメーだけいい格好させるかと、狭量な店のオーナーに、

前もってしてやられてしまつては、いくら天下のルイ・コプリといえど、後にどうあがこうが、徒勞に終わるようだった。

けれど、彼も負けてはいない。

色っぽい仕草で腰を屈め、わたしを見つめて、口づけができそうなほど近くで、いたずらっぽく微笑む。

——「次はうるさいお兄さんは抜きで」

その後の兄の慌てっぷりといったら、おかしくてならなかった。

もう少し冷静に事を見極めて欲しいものだ。

厄介な身内にもわかるような大きな声で睦言をささやくカサノバが、世間にいくらいるというのだろう。

つまり、彼の本意はそういった誘惑にあらず、兄をおちよくることにあつたというわけだ。

ルイと二人でひとしきり笑つて、最後には、自分は単なる一興にすぎないことを知つた兄に、やはり二人一緒に大変な剣幕で怒られて、やつとのことで帰つてきた憩の我が家であつた。

けれど、なぜか、今夜は遅く帰ってくるはずのフィンと玄関ホールでばつたりと行き合い、首をかしげつつ、腕時計で時刻を確認するはめになった。

「午後十一時、だね」

横からわたしを覗きこみ、フィンはふんわりと笑つた。

「そうだね」と、うつかり流されてしまいそうになつたが、そこではたと気づく。

——おかしい。

就業時間から、まだ三・四時間ほどしか経っていない。

女と甘い夜を過ごした割には（ただし、わたしの勝手な推測にすぎない）早すぎるご帰宅ではなからうか。

てつきり翌朝まで彼の顔を見ることもないと思つていた。

このように、頭の中では目の前のうさんくさい小悪魔への疑問は

尽きなかったのだが、ひとまずそれは保留として、とりあえず、二人、肩を並べて階段をのぼり、一緒に家に入った。



「ねえ、誰にされたの、それ」
「んー？」

先にシャワーを促し、愛しのソファーに倒れこんで、むにゃむにゃと待機中であつたわたしに、ごく短い時間で、一日の汗なり汚れなりをキレイに流し終え、身なりをラフに整えたフィンが、音も立てずに近づいてきた。

「ねえ、誰？」

あつという間に間近に迫つたフィンだったが、やっぱりうっとおかしいことに変わりはない。

このときのわたしは、お腹も満たされ、眠くもあり、そしてちょっぴり不機嫌だった。

それは、なんとなく、同居人として、今日のフィンの行動に思うところがあつたからかもしれない。

だから、どうしてか、挑発じみた、意地悪ない方になった。

「大人な人に、おもちゃにされたの」

その声は、わたしの意図せずして、思いの外、舌っ足らずで、ほんのりかすれて、わたしにしては、珍しく、拗ねた女の子なものだった。

これは、疲れと眠気が重なった、偶然という名の不運な事故に他ならない。

実は、先の言葉の真意は、日常、わたしには決して起こり得ないような艶事めいたことを敢えて絡ませて、相手にもその意を酌んでもらった上での、「こういうえば満足かよ」という、一種の喧嘩腰の皮肉であつた。

仕事を持つようになると、このような無理やりな言葉遊びを大人

同士でよくするのだが、今回の相手は、まさに子どもであった。

こんなときに、使う相手を間違えるなんて、どうかしていたとは思えない。

フィンは、少し驚いたように目を大きく見開いて、それから少しもしない内に、口端をにやりと歪ませた。

「モモがやらしーこというのって、なんかすごい興奮する」

違う！ そんなつもりじゃないの！ と、心は金切り声を上げて叫ぶのだが、もう後の祭りだった。

片腕を引かれ、寝室に向かって横抱きにされたときにはもう、わたしはすでに、夢とうつつを彷徨っていた。

これまで、やや無理なスケジュールが続いていたこともあって、眠気から耐え得る力も、平素より、かなり足りなかったように思う。真っ白なシャツにうつむき加減に下ろされてすぐ、背中に人の暖を感じれば、灰色の薄い生地ニットに歯を立てられ、にわかにブラジャーのホックを外された。

流れるように、長く繊細なフィンの指先で身体中を愛撫され、優しく導かれ、意識は夢の中にあるにもかかわらず、不覚にも、うっとりとしてしまったのは、いい年をして、本当に情けない限りである。

友人のミーシャの忠告は正しかった。

結果、三日も持たなかった。

かわいいフィン・スピアーズ少年の手管は、恐ろしいほど甘美で逃れがたいものだった。

幕間

アルメニアの紙に火をつけて、それを橙色のテラコッタ調の小さな皿の上にそっと置く。

昔ながらのこのお香は、国のいたるところの薬局で売られており、旅のお供には必ず連れて歩く、わたしの大切なお気に入りの一つである。

細長い蛇腹の紙に、だんだんと火が移っていく様子をじっと見つめている内に、部屋の中にほんのりと、なつかしい素朴な香りが広がった。

こうすると、空気中の雑菌を清める効果もあるというが、実際にはどうだろう。

そしてその対象には、人の煩惱は含まれるのか否か。

そう考えて、はあっとため息をつく。

こここのところ、わたしは自己嫌悪の連続だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4538q/>

n i g h t & d a y

2011年4月29日09時55分発行